

◆特別講演◆

人の心を見る

— 人生常に青春 —

熊本県立劇場館長

鈴木健二

皆さん今日は。実は私は明後日病院に入院致します。肥満のためではなく、胃のポリープを除るために入院するのですが、これが今生のお別れかも知れません(笑)。

私は過去に3回入院や手術を経験しました。最初は昭和初期の頃、小学校1年の時でした。急性中耳炎で入院し、即日手術をされました。手術台に縛り付けられ、全身麻酔をされながら数を数えたのですが、47まで数えた時、意識が朦朧として来ました。しかし、その中で聞こえた耳の後の骨(側頭骨)を削られる音が、今でも耳についていて離れません。片側臥位でベッドに寝ていたんですが窓の外が見られず、鏡を使って窓外を見ていました。皆さん、病院の病室ではベッドの位置が決まっているでしょう。だから寝た切りの患者は毎日同じ所しか見えないのです。日本では会社のオフィスでも各社員の座席が決まっていますが、どうも日本人は一度型にはまったら、なかなかその型を変えない習性があります。もし、ベッドを180度動かしてくれたら患者は全く違う景色をみることができなくて、これが随分患者の気分転換になるということを考えてほしいのです。

そんな病気をしたために、私の母は私に対して随分過保護になりました。私は超鈍足だったので、学校の運動会が大嫌いでした。カケッコはいつもボリでした。私は風を切って走っている積もりなのに(笑)。鉛筆も母が削ってくれたし、修学旅行にも母は付き添って来ました。学年でただひとり(笑)。過保護は良くないと言いますが、私はこの幼時の体験を通して、弱者へのいたわりを知りました。看護婦さんは患者さん達に同じことをしても、患者の受け止め方は、それぞれ異なります。

看護は看護婦さんと患者さんの心の通い合いなのですが、患者は看護婦という自分の命を託する職業の人に信頼感をもっており、さらにその人が女性であることに親近感をもっているのです。最近では看護士という男性の看護職もみられるようになりましたが、女性が本来備えている親近感により、患者は女性である看護婦に親近感を持っているのです。

皆さん、小さい子供に絵を書かせると、女の子はお花とかお人形とかいった生命のあるものを必ず描きます。ところが男の子は、例えば機関車とか飛行機とか軍艦など、命とは関係のない自己主張の強いものを描きます。人はそれぞれのいい面を伸ばして行くということが大切です。

「ボランティア」の語源は「われここに存在す」という意味なのです。また、看護婦の「婦」は昔は「箒を持った女の人、つまり、日常生活の中で、何でも出来る人」という意味で、位の高い人のことを指していました。アメリカではここ10年前から、「女性は職場にあっても、常にレディであれ」と叫ばれています。

私の2度目の病気は中学の時ですが、私はそれまで泳げなかったのですが、水泳部で泳げるようになりました。最初に泳げた時の感動は忘れられません。それどころか、中学4年の時には5時間の遠泳に只一人成功しました。しかし、その直後に胃痛と悪寒がひどくなり、お医者さんに診てもらおうと、そのドクターは何と産婦人科医で(笑)、「泳ぎ過ぎてお腹が冷えたのだ」と言って温めてくれたのですが、実は病気は中垂炎だったのです(笑)。お腹の痛みはますますひどくなり、今でいう救急車で病院に運ばれて緊急手術を受けました。局部麻酔だったのですが、この手術では抜糸後縫合部が化膿しまして、今でも10cm位手術創の痕

が残っています。

それから3度目の手術は今から14年前で、その頃私はNHKで癌の番組を追いかけていたのですが、突然左の腎臓から大出血を起こし、それが膀胱に下って膀胱内で凝血しました。その時、私はこれは腎臓癌だと思い2度と病院を出られないかも知れないと思いました。入院患者は自分は回復して病院を出られるだろうかということをいつも考えているものなのです。

この入院で腎臓の検査の時、ドクターから造影剤が入ったら左の足の親指が熱くなると説明されたのですが、実際は違っていました。まず心臓の部分が熱くなり、それから肛門を熱風が吹き抜け（笑）、最後に足の親指が熱くなったのです。

医師が患者に説明することは、殆ど本の知識からでしょうが、実際は本と異なる場合が多くあります。患者は医師や看護婦の言うことと異なる症状があると、こわくて言わないため、医学や看護の進歩が遅れるということがあると思います。これは患者の現場で何が起きているかをよく把握しないで医療・看護を進めるわけで、患者が心を開けるような環境を作ることが大切です。

私は医師と看護婦の間に患者があり、医学と看護学の間に患者学があると思っています。例えばお見舞いの場合でも同じで、日本では病人を見舞う時、ベッドの足元に立って話をするのですが、あれは患者の枕元近くに立って顔を見ながら手を握ってあげる方がいいのです。看護婦さんも患者の近くまで来て顔色を見、声をかけてあげることが大切です。

対話では自分の心をどう相手に伝えられるかが大事ですが、最も気持ちが通ずるのは、相手の目と自分の目の距離は30～50cmが一番いいんです。これは赤ちゃんがお母さんのおっぱいを飲むとき、母親の目と赤ちゃんの顔の距離でありまして、母親が授乳をしながらささやきかけて、母と子のコミュニケーションを密にするその距離なのです。これは教育の鉄則ですが、「優しい声で教えられる人は、大きい声ではもっと教えられる」と言われます。そういった基本的な人間工学が日本には欠けているのです。

看護婦さんは与えられた条件に迅速適確に反応することが大切ですが、更にまた、一人一人の患者に対して固有の看護観があると思われるのに、それが何故看護記録には書かれていないのでしょうか。そのような

ことを書くカルテスペースがないのです。検査結果でも同じで、血液検査の結果でも、そのデータに関して検査者の意見を書く欄がなく、単に検査結果を羅列してあるだけです。もっと現場の方は意見を出していくべきだと私は思います。マスコミは常に危機感をあおるような言い方しかしないので、看護職についても“3K”の一つなどと書かれているが、看護という職がどんなに素晴らしいものかということに、自信をもってどんどん抗議していくべきです。

看護では知識と心とをどうやって寄せ合って行くかが問題ですが、患者はいつも「自分は死ぬのではないか」という不安を持っているものです。それで患者は看護婦さんの日常の些細な態度をいつも見えています。女性らしい（今は男性の看護士もあります）優しい振舞い、節度のある態度を患者は求めています。忙しい態度で患者に接するのが一番いけません。看護婦は患者を見詰めていると同時に、患者に見詰められているのです。

看護婦さんは患者の健康状態の回復をどこで見られるのでしょうか。人の健康はどこ病気の場合であっても、必ず食欲に反映して来ます。個室の患者でも、食事の前後に「いただきます」、「ごちそうさま」が言えるようになった時、患者は回復に向かっていると言えるでしょう。これはその人が他人のことまで考える心の余裕が出て来たことを示すのですが、こんなことは看護婦さんは看護学で学ばないのではないのでしょうか。

挨拶の挨拶は「ひらく」、挨拶は「せまる」ということを表すのですが、要するに自分から心を開いて相手に声をかけることなんです。廊下ですれ違っても「いかがですか」の一言が、患者に大きな喜びを与えます。嫁姑のよい関係を作るのにもなるべく多くお互いに名前を呼び合うことが必要なんです。患者に一言いう時でも「お元気ですか、鈴木さん」と名前を付けて呼ばれるととても嬉しいのです。

私は若い頃からボランティアとして障害者や精薄者にささやかな光をあてる力になりたいとの念願を持っていたのですが、平成5年4月25日、700人の障害者を含む4,000人の大合唱による「こころコンサート」を県立劇場で開きました。この初めての企画を実施するためには、障害者の方々も長い時間と努力が必要でしたが、その準備期間を通して皆が知ったのは、障害を持つ人達は本当にうそをつくことを知らないで、自

人の心を見る

分の持っている能力を一生懸命伸ばそうと努力している美しい姿の人達なのだということでした。

人間は皆その内部に美しいものを持っているのです。この「人は皆美しいものを持っている」と信じている象徴が看護婦さんであり、そのことから医師や看護婦などの医療者側は「患者に診療・看護をしてやっている」のではなくて、「診療・看護をさせて戴いている

のだ、患者さんありがとう」と感謝の気持で行うのが看護の原点だと思うのです。インドの診療はこの観点に立って行われているのを私はインドで暮らして知ったのですが、今後わが国でも医療・看護のますますの発展が望まれるにつけ、常にこの看護の原点を失わぬよう見詰めて行って欲しいのです。